

# ハンマー10話

## 第4話 昆虫採集(その1)

株復建技術コンサルタント 吉川謙造

趣味で蝶の採集をはじめてから、かれこれ30年近くになる。その間に採集にかける情熱は時々うすれかけることはあったが、とにかく消えることなく今まで続いて、現在も標本は少しづつ増え続けている。

今のように地質調査の仕事などに年がら年中追いまくられていると、あっという間に一年が過ぎてしまい、季節感など感じている暇がない。年が押しつまって、雪が降りはじめると「ああ、又いやな時期になったなあ」と思う程度で、子供の頃には確実に持っていた、季節や自然に対する感激やよろこびの気持ちが、次第に薄れて行くのが我ながら残念でならない。

たとえ、仕事一筋にみえる多忙な人でも、動物、植物等自然に愛情ある目を向けるとのできる人は、どこか人生にも余裕があるようで、何となく親しめるし、話しの合う事が多い。

春が近づくと、何となく、ワク、ワク、ムズ、ムズして補虫ネットを取り出して、網の破れをつくろったり、つなぎ竿(補虫ネットの柄)の具合をたしかめたり、はたまた、標本箱をとり出して、去年までの獲物をながめて「4月10日頃にはカタクリの花も咲くだろう。今年はどこいら辺まで行って春の女神“ヒメギフチョウ”や“ミヤマセセリ”にお目にかかるか。」とか「一昨年はうんと採れたあの場所も昨年の秋はブルドーザが入って何か工事をやっていたから、もうダメになっているかもしれない。」など色々と思いをめぐらせる。

これだけで漫然と「春」を待つより、数段春の訪れは楽しく待遠しくなる。

30代から的一年、一年はまるで飛ぶように過ぎ去ってしまった。これに比して、10代、20代の歳月は充実していて、何と長く感じられたことか。工期、工期と追いまくられて、「あと何日、余分に欲しい」などとアセっていると、月、日はまたたく間に失われてしまい、それとは逆に先に楽しみ事や、やりたい事をいっぱい抱えて「早く休みが来ないか」「早くその日が来ないか」と待ちこがれて(それほど苦労もなく)過ごした日々は、時間が何倍にも引きのばされ、又、その中で経験した喜びは自分の人生にとって大切なモノとして、心にきざみ込まれているためかも知れない。今の境遇では仲々できない相談かも知れないが、時間

に追われるのではなく、少しでも自分の方から時間を追いかけたり、楽しんだりするような心境になりたいものである。

話しが少々それてしまったが、いよいよ採集に出かけることにしよう。日帰りで出かけるのなら、軽装で十分である。補虫ネットと三角缶(とった蝶を入れる)と弁当を車に積みこんで出発。

子供達も一緒にいて来たがるが、採集目的がそれほどめずらしい蝶をねらうのでなく、適当に網を振って来るつもりであればつれて行く。しかし「今日こそ絶対にねらいつけてアノ種類を採るのだ。そのためには、子供のことなどまつてられない。」という日であれば、冷たく振切って出かける。このあたり、プロとアマの中間的心境といえる。

目的地に着くと、心配と期待の半ばした思いで、網を手に辺りに人が居ないかどうか見まわしてから、車外に踏み出す。他人がどう思おうと別にかまわないようだけれど、やはり「いい年をして…」という目にはふれたくないのだ。

こんな時には子供同行の方が気は楽である。「俺は仕方なく子供について来てやっているのだ。」といった顔をしていれば良い。もっともそんな顔がうまく出来るというわけではなく、唯他人がそう思ってくれるだろう、という事にすぎないのだが…。

それでも、道端の草むらにヒラヒラと舞う蝶の姿が目に入れば、そんな雑念などたちまち消えて、脱兎の如く草むらに飛び込んで網を振りまわすことになる。

獲物が網に入れば心はそれに集中して、早く三角缶に収めたい一心で他人の事などまったく気にならなくなってしまう。

こうして、ようやく人間社会のわざらわしさからのがれて、自然の中へとけ込んで行く。

一汗かいて我が家へ返れば、夕食のビールも又美味く、「今日は○○蝶と△△蝶がとれた。」「××蝶には惜しくも逃げられた」などと、他人には面白くも何ともないかも知れないような話しがはずむ。

一緒に出かけた子供達が、カモシカにでも出会ったものなら、それはもうめずらしい、宇宙人か怪獣でも見て来たかのような大変なさわぎである。

## 第5話 昆虫採集(その2)

30年近くも蝶採集を続けていると、いつの間にか標本もたまつてくる。我家の標本箱も10箱を超えて少しばかり他人に見せて自慢のできる代物となってきた。

訪ねて来て下さる方にも時々お見せするが、自然の芸術品とは良く言ったもので、実に美しい色彩のものが多い。

アゲハチョウ、タテハチョウ、シジミチョウ…どれをとっても、どうしてこんなにきれいな生き物が出来るのか、不思議としか言いようがない。

標本を見て色々と質問や意見を述べて下さる方が居るが、中でも私が困らされる質問がいくつもある。その3つの代表例をあげてみよう。

その1つは「どれが一番めずらしい蝶か？どれが一番高い（高価な）蝶か？」という質問である。

正直に「私の標本はそんなにめずらしものはありません。どこにでも居る普通種ばかりです。」と言えば大失望されるので、できるだけ見栄えのしない蝶（ヒカゲチョウ類はこれに属し、あまり皆さん良くみて下さらない）を選んで、「これとこれは天然記念物にも指定されている蝶で、大変に貴重なモノです。」と説明して納得していただくことにしている。「世界中で一匹しか居ない蝶は持っていますか？」（生物学的にこんな生物が存在することはあり得ないのだが）という質問もこれに類する。一々、生物学的な個体発生論など論じてもシラけるだけなので、適当な蝶を指して、「これは世界でも千匹位しか居ないといわれている蝶です。今では百匹位に減って、もしかしたら絶滅するかも知れません。」と説明する。そうするとその人は「世界で一匹」を見るのはあきらめて、それでも目を輝かしてシゲシゲと我が“珍蝶”に見入って下さるのである。

“高価な蝶”については、私は標本を売買したことがないので、どの蝶がいくら位するのか実は

良く知らない。

しかし、昆虫標本が売買されているのは周知の事実で、一匹300円が相場のカブトムシやクワガタムシが仙台七夕の夜店では1,200円もして常識を知らないこのオトウサンは子供に買ってやると大見栄を切ったばかりに、目の玉が飛び出る思いをさせられた経験があるし、又、天然記念物に指定されている蝶が一頭（蝶は一匹、二匹と数えるのではなく、牛や馬のように一頭、二頭と数える）1万円もの値段で売買されたり、採取禁止の所で採取して警察につかまつた人が「実は一頭〇千円もするもので…」と白状したなどという話が新聞に載っていることは知っている。

そこでこの手の質問に対しては、大きくて美しい蝶に何百円と安い値段をつけ、小さくて薄ぎたない種に何千円と高価な値段をつけることにしている。こうすれば、小さくて見栄えのしない蝶も、この時ばかりは尊敬とせん望の眼差しを浴びることになり、質問者はあまりに自分の持つイメージとかけ離れた蝶の評価法に恐れ入って、次の質問は発しなくなるのが通例である。もしも、大きくてキレイな蝶が質問者の思惑通り高額であったりすると、その人は次々と自分の気に入った蝶を指して評価を聞いたがり、すべての蝶に値段をつけなくてはならず当方は疲れ果ててしまうハメになる。

第2の質問は批判というべきものかも知れないが、「こんなにいっぱい蝶を取ったのでは、自然保護に反するのではないか」という意見で、案外と女性などに多い。

「自然破壊とは、生態系のバランスを崩すような行為で、蝶の食べる草や木の生えている所をブルドーザで根こそぎ開発する方が大変で、そこいらを飛んでいる蝶を10匹や20匹つかまえても自然環境にはちっとも影響を与えるものではない。」

などと口をすっぱくして論じても先ず聞き入れてはもらえない。

「でも、こんなきれいで小さい蝶をとってしまうのはかわいそう。」などと、当方が極悪非道な悪者に仕立てあげられるのがオチである。こんな時は、おもむろに奥の方から別の標本箱を取り出し、「これは全部ドクガ（蛾）の種類です。これがチャドクガ、これがキアシドクガ、スキドクガ…これとこれは、毛虫と成虫だけでなく、卵の時も蛹の時もさわっただけでカユくなり、赤くはれて熱を出す人も居ます。こんなのが大発生すると杉の花粉症どころでは無くなって、赤ちゃんや女性は大変です。」と説明することにしている。さすがの自然保護論者もドクガの標本（但しこれはウソで本当は蝶）を前にして、これは可愛うだから保護しなさいと主張しなくなる。

第3は最もポピュラーな質問ではあるが、蝶と蛾の違いと見分け方である。

実は、これは大変にむずかしい問題で、確固たる区別がないといった方が良いのである。

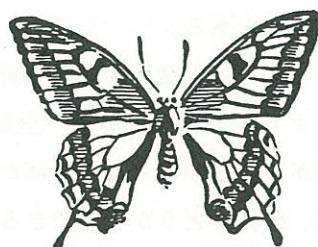
昼飛ぶのが蝶、夜が蛾といつても例外はいくらでもある。むしろ、昼飛ぶ蛾の方が多くの現実だし、止った時の羽のたたみ方や触角の形などでも完全には分けられない。

世界の蝶類図鑑などみると蝶より蝶らしい蛾や、蛾らしい蝶などいくらでも居る。フランスなどでは蝶も蛾もいっしょくたんにして蝶と呼んでいたりもする。

結局、同じ鱗翅目（りんしもく）の中で人間共が勝手にこれは蝶、これは蛾と線引してエラそうな顔をして研究しているにすぎないともいえる。

しかし、「蝶と蛾は区別がありません。同じ種類（目）に属するものです。」と言っても、質問した人はどうも釈然としないようであるから、私は「一番良い見分け方は女の子が『アラッ、蝶々ヨ』といって追いかけて採ろうとするのが蝶で、『キャッ、ヤダッ、蛾ヨ』といって逃げまわるのが蛾です。これに勝る判定法は今のところ確立されていないようです。」と説明することにしている。

(この巻 完)



## 第6話 鉱物採集

地質調査をメシの種にしている人間なら、誰でも岩石や鉱物の名前を空んじていて、たちどころに鑑定ができるだろうと普通の人達は信じているようだが、これはとんでもない買いかぶりである。

地質学の範囲に含まれる学問を教えあげても岩石学、鉱物学、層位学、鉱床学…とそれこそ多岐に亘ってはては月や火星の地質を研究する分野すらあり、それぞれに大家が居られる。自分の分野に限ってみれば、大変にくわしいが、他の分野の知識すべてにわたっても一流という人は、極く稀れにしか居られない。

自然界というものは判っている事の方が少なく、判らない事の方がむしろいっぱいあるということを認識すれば、これも仕方ない事だと判ってもらえるだろう。

中世ヨーロッパの高名な化石の研究家の弟子がいたずらをして、先生が調査に行く場所に先まわりして、石に変てこな模様を刻み込んでころがして置くと、先生はそれを発見して次々とめずらしい化石について学会誌に発表していった。日く、“星の化石” 日く、“愛の化石” …

そのうちに自分のイニシャルが入った石をみつけて、さすがの先生もこのいたずらに気がついてそれ以後いいかげんな研究を反省して、論文を書かなくなったりという話しである。

それほどの大家でなくても巡査のフィールドで引率した生徒からコンクリートや碍子（高圧線の絶縁物でセラミック製）の破片の鑑定をたのまれて、立往生した地学の先生など、この手の話しそゴマンとある。

日本には顕微鏡やX線分析でないと判定できないような鉱物も含めて、全部で約800種類位の鉱物が産するが、これを全部たちどころに鑑定できて、新種かどうか判定できる人は恐らく日本では10人にも満たないかも知れない。

一般的地質屋であれば、このうちで最も良く出て来る石英、長石、雲母等の造岩鉱物や黄銅鉱、黄鐵鉱等の金属鉱物を10~20種類程度も決定できれば良い方である。

あとは一般大衆と同様に頭をひねるが、判ったような顔をして、いい加減な名前をつけてすましているかどちらかである。

大学の地質学講座を修めた人さえ、満足なルートマップを書けるとは限らない世の中であるから、こんなことで驚くにはあたらない。

鉱物の名前が判るというのは簡単なようで、実はかなり大変なのである。動物や植物のように一種一種別々に出て来ることは少なく、他の鉱物と一緒にになって、ごちゃごちゃと一つの岩石を作っていることが普通で、単結晶（クリスタル）はむしろめずらしい。

又、単結晶が出て来たとしても、人間の顔同様に全く同一の結晶はほとんどない。

例を最もポピュラーな石英（水晶）にとってみても、大きいの、小さいの、又、長いのあり短いのあり、色は無色透明から白、緑、紫、黒、煙色とこれも数々あり、さらに形も六角柱状ばかりとは限らず、三角形、四角形から板状そして、ねじれているものさえある。こうしてみると、水晶一つとっても正確に鑑定できるまでには長年の経験が必要ということになる。人間が白人、黒人、黄色人種と違う以上にバラエティに富むのが鉱物であり、だから鉱物を集めるというのは大変に面白く興味も尽きない。

私は鉱物と鉱石を趣味で集めてかれこれ十数年になる。商売柄、ハンマーを持ち歩くことはあっても、純然たる鉱物採集は全く別物で、最近はあまり多くないが、それでも年数回は採集案内や同好の人からの情報を頼りに、一人又は何人か連れ立って採集にでかけている。

昔は、このような趣味を持つ人も殆どなく、以前に発見した露頭を再訪すればちゃんと元のままであったが、最近はまったく違っている。山奥の人も踏み込まないような所でみつけためずらしい石の露頭など、まだ沢山あるからと採り残して来たりすると、次の機会に訪れた時には、手の届く限り全部掘り取られて大きな空洞になっていたり、小型自動車位の転石が跡形もなくそっくり無くなっていて、（もちろんトラックなどは入れる所でなく、又、ダイナマイトによる発破をかけた形跡もない）一つ山や沢を間違えたのではないかとびっくりすることもある。

執念の固まりみたいなコレクター（又は標本屋）が居るもので、情報の伝わる早さにも又、おどろきである。

私はそれほどの気違いではないが、それでもサンプルの数は次第に増えて、書斎の棚に並べたり、箱に入れて保存したりしているが、とうとう重さに耐えかねて二階から一階へ、そして物置へと疎開させざるを得ない羽目に陥ってしまった。

アマチュア（鉱物学者で無い人）の鉱物採集家にはこれ又変った人が多い。日本には世界一の鉱物コレクターで、5万点の標本を所蔵し、鉄筋コンクリート三階建の茶室付きの標本室（本人は謙遜されて室といっているが、実は立派な博物館といつても差支えない代物である）を持っている人が居る位だから、この人の弟子を自認する人をはじめ、実に多勢の実力者、変人がひしめいているのである。

他人には何の変てつもない“汚ない石ころ”がこの人達の宝であり、それこそ女房、子供より大切にしている。

もちろん、金、銀の鉱石やダイヤモンド、ルビー、サファイヤ、エメラルドといった宝石の原石などは素人目にも価値がありそうだと判るが、わけのわからない石を出されてルーペでのぞいた上、こ

れが世界で初めてみつかった珍しい鉱物だと説明されても普通の人には全然有難味が湧かない。

しかし、この反対もある。我家にも色々な宝石の原石があることはあるが、これが実は爪のアカ程度のサイズで、もちろんカットして磨くこともできないし、標本的価値もゼロに近いものばかりである。ところが、子供達はそんなことは知らない。近所に出かけてうちにはルビーとサファイヤとダイヤモンドとエメラルドがザクザク有るとふれまわっている。見かけはみすばらしいこんな家に実はそんな隠し財産があったのかとひそかに空巣にでもねらわれては大変とヒヤヒヤしている次第である。

又、これとは反対に立派な標本や高価な宝石類を実に無造作に誰でも入り込める鍵のかからない小屋に雑然と放り込んでおいて、平然としている人もある。

鉱物のサンプルが増えすぎて、部屋に自分の寝る所がなくなって、廊下にふとんを敷いて寝ている人、はたまた、自分はボロボロのせんべいぶとんにくるまって寝ているのに、鉱物のサンプルは全部真新しい綿でくるんで箱に入れて、大切にしまっている人、等々いわゆる変人が多いのが我々の鉱物仲間である。

突然見ず識らずの人から電話をいただいて、当方の知り合いを通じて紹介されたのだが、今日は出張で仙台へ行き、夜は暇が出来たのであたなの標本を是非見せてくださいと言われることがある。

こちらもむげにことわり切れないで、どうぞどうぞという事になり、その夜はサンプルを見て先ず一杯、それから夕食を食べながら色々と鉱物談議に花が咲いて、結局は泊って行ってもらうことになったりする。その時にお土産としていただくのはこれ又、石のサンプル。このようにしてゴロゴロと我が家には石が増え続けて行くのである。

（以上）